



WEEKLY REPORT ROTARYCLUB OF hakusanishikawa

ガバナー方針:「一歩前進しよう(one step ahead)」 クラブ基本方針:「この地球を優しさで満たそう...未来ある子ども達のために」

白山石川ロータリークラブ

2019年7月17日 No.839

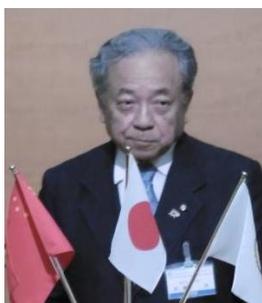
会長:武藤一彦 幹事:織部資子

クラブ会報委員長:永瀬喜子 副委員長:藤本和久 委員:五十嵐隆介・林 哲也・多田 茂

事務局/白山市西新町 159-2 松任産業会館 4階 TEL076-274-2907 FAX076-274-2908

Mail:info@hakusanishikawa-rc.jp HP://www.hakusanishikawa-rc.jp

◆会長挨拶 (武藤一彦会長)



来週は、納涼例会として家族で楽しむ会が催されます。RI会長の言葉の中に「ロータリーは、家族との時間を犠牲にするのではなく、家族との時間を補うような経験を提供する場である必要があります。クラブが温かく、みんなを受け入れるような雰囲気があれば家族と奉仕活動は両立でき、家族思考の若い職業人にロータリー奉仕や市民としての参加の機会を提供できます。」

私は、小児科医として沢山の子ども達を診てきました。特に心の病気で出会った子ども達で感じたのは、子ども達が好んでそうなったわけではなく、育ってきた環境が大きく影響しているということです。つまり、そうなる理由があったということです。中でも子どもが最初に出会う人間として父母との信頼関係:絆が大事だと思います。私の思い出の中に、関東では珍しく雪が降った日に、父と買い物に出かけた事がありました。

5歳頃の事です。父が突然、私を抱きかかえ、生け垣に降り積もったベッドのような雪の上に置いてくれました。腕のぬくもりが雪に埋没する私の体を力強く支えてくれました。ほんの一瞬の出来事でした。しかし、その時の情景と父の子どもに何かの体験をさせたいという気持ちが伝わりました。無口な父の意を決した行動でした。

子どもにとって親は絶対の存在です。反抗期があれば、それが正常に育っている証でもあり、それに合わせてくれた親のありがたみは後から理解できます。

子育てで、何が一番大事か?と考えあぐねた末の結論は、「如何に多くの楽しい思い出を子どもに残してあげられるか。」ではないかと思っています。

納涼例会が、子ども達にとって楽しい一時となり、また会員にとっても心が開かれる一時になることでしょう。

◆お客様の紹介

◆お客様の紹介

・RI2610 地区 RLI 委員会 委員長 柳生 好春様(野々市 RC)

◆表彰の伝達

R財団 マルチプル・ポールハリス・フェロー 永瀬 喜子 君



◆前年度会計報告、監査報告

前年度会計 山本篤君



◆幹事報告 (織部資子 幹事)

- ・7/16 ロータリー米山記念奨学会より ハイライトよねやま 232 が届く。
- ・7/16 ガバナー事務所より (公財) 米山梅吉記念館創立 50周年記念特別寄付のお願いが届く。
- ・7/16 ガバナー事務所より 2019-20年度 米山奨学生一泊研修会のご案内が届く。日時:2019年8月3日(土) 9:00~ 8月4日(日) 20:00 解散。研修先;米山梅吉記念館(静岡県駿東郡長泉町上土狩 346-1) ディリラさん、出席です。

◆会員卓話

演 題「今、なぜ RLI か」
講 師 RI2610
地区 RLI 委員会委員長
柳生 好春氏



◆出席報告 (西田直樹副委員長)

- 出席率： 70.59%
- 出席者： 24名 / 35名
- 出席補填： 0名
- 出席免除者： 0名
- メーキャップ： 1名 (7/13
池元ことみ：クラブ社会奉
仕委員長会議)



◆ニコニコボックスの発表 (竹田佳一委員長)

- ・武藤 一彦 会長：柳生さん、卓話ありがとうございました。RLI 全員参加で心新たにロータリーに取り組むことが良いですね。
- ・織部 資子 幹事：柳生RLI委員長、卓話ありがとうございました。参加すればした分、勉強になる事ばかりと痛感しています。
- ・小柳 善裕：柳生パストガバナー、その節はお世話になりました。また本日は、「RLI」卓話ありがとうございました。
- ・永瀬 喜子：柳生パストガバナー、本日は卓話ありがとうございます。これからも我々のリーダーとして色々ご指導をよろしくお願いいたします。
- ・山本 篤：柳生さん、お久しぶりです。本日は卓話ありがとうございます。
- ・多田 茂：柳生委員長、お忙しい中今日は卓話ありがとうございます。
- ・池元ことみ：RI2610 地区 RLI 委員長 柳生様、ようこそ!! 本日は卓話ありがとうございました。
- ・野澤 誠治：柳生様、本日はありがとうございます。
- ・小路 昌弘：先週は宮崎出張で欠席したため、本日誕生日祝いを頂きました。ありがとうございます。



本日合計 11,000円 今年度累計 56,000円

---ちょっと読んでみてください---

(ちょっと長いですが...)

ポール・ハリスのロータリー寛容論

ポール・ハリスの論文「Rational Rotarianism」に引用されているポール・ハリスの考え方の中核となっている部分を紹介しておきます。

ポール・ハリスは、1907年から、親睦団体であるクラブの中に奉仕の概念を入れようとしてきました。この時のポール・ハリスの考え方は、「はじめに親睦ありき」その上に、高次の概念としての奉仕が出てきたのであるから、奉仕が高次の概念である以上は、それが親睦と相容れない場合には、親睦を抑えて奉仕が生きるべきだ、と言う立場をとりました。

その結果、当然のことながら、クラブ親睦が崩壊してしまっ

たのであります。そこでポール・ハリスは、ロータリーにおける親睦と奉仕とを上下の関係において捉えたことの誤りに気付いた訳であります。即ち、親睦と奉仕とを等位の概念として捉えるべきであった。この両者は、ロータリーという社会制度において、表裏一体の関係にある。いずれを優位させてもいけない。ロータリーは、親睦と奉仕の調和の中に宿る、と彼は悟ったのであります。

このことを論文に書いたのが「Rational Rotarianism」であります。彼はこの論文の中で次のように言っています。

「神様の思し召しにより、一段と高いところに登ることを許され、ロータリーとは何かと問われれば、自分は躊躇することなく、寛容(toleration)と答えるであろう」彼は、ロータリーは、親睦と奉仕の調和の中に宿る、と説いたのであります。即ち、「ロータリーとは寛容である。親睦も大切だが、奉仕も大切。奉仕も大切だが、親睦も大切。したがって、ロータリアンは寛容な心を持つことが大切である。自分の考え方を相手に押しつけてあってはならない。ロータリーは、このような思考の世界の中にある。」これが、ポール・ハリスのロータリー論でありました。

このようにして、ロータリーが、その思考の体系として、その外延(外堀)を確立したのは、1910年にポール・ハリスが「ロータリーは寛容の中に宿る」と自覚した時であります。したがって、1910年までは、無反省的な、無意識的な原理の開発に過ぎなかったわけでありました。

ロータリー寛容論を自覚したときに、ロータリーの意識的な体系的思考の外延(外堀)が完成するに至ったと言えるのであります。したがって、思想史的な視点から見ると、ロータリー思想の原点が据えられたのは、1905年ではなくて、1910年のことであり、それまでは、意識下の無反省的な試行錯誤の期間であったと言わなければならない訳であります。

